

読み合わせ会の愉しみ―石井鶴三挿絵鑑賞の奥行き―

福江良純（北海道教育大学釧路校）

はじめに

石井鶴三の没後 40 周年を数えた今年、上田市の上小教育会内に置かれる石井鶴三美術友の会（以下友の会）も結成されて 18 年目を迎える。友の会は、石井鶴三美術館（昭和 60 年 7 月開館）の開館 10 周年に向けて、石井の没翌年（昭和 53 年）に結成された「石井鶴三を偲ぶ会」のメンバーが中心となって、「互いの教養を高め、自主的な研修活動を通して地域文化の向上をめざす」ことを目的に掲げ、平成 7 年 7 月 22 日に設立された。当初、「石井鶴三美術館友の会」であったが、石井鶴三美術館の建築物が閉鎖され、資料館となって小教育会会館に併設された平成 20 年に友の会が現在の名称に改定された。今日まで、友の会は年に一回の総会と各種の研修会を開き、美術を通じた石井の教育精神に心打たれた人々の研究団体として教育会内において機能している。

年間活動計画に基づく運営がなされる友の会が、年に数回実施する研修会のうち、「読み合わせ会」と銘打たれた少し聞き慣れない取り組みがある。しかし、これこそが石井美術が残したものを語り継ぐ上で、最も豊かな発見に満ちた奥行きある観賞会であり、平成 8 年から今年までの間、実に 90 回を超えて開催されているのである。本稿は、平成 25 年 8 月 28 日（水）、上小教育会館において実施された平成 25 年度第一回目の読み合わせ会のレポート及び、その前後の経緯を綴った石井鶴三探訪の紀行である。

1. お誘い

石井鶴三の法定相続人代理人の岩部定男氏から職場に電話があったのは 8 月 12 日（月）の昼前だっただろうか。岩部氏は、「土曜日に手紙を出したのでまだ届いてないと思いますが」と前置きをして、28 日（水）に上小教育会館で開かれる読み合わせ会について案内をしてくださった。私がこの案内を頂くまでには若干の経緯があった。

そのおよそ 2 か月前のことである。近々刊行になる論文や研究成果、これからの石井研究に関わる計画やその思いなどを報告するため、行文社に電話をしたところ、7 月 6 日（土）に石井鶴三美術友の会総会が上田教育会会館で開かれ岩部氏も参加されること、是非一度お会いしたいという岩部氏からのお気持ちを拝聴した。これまで石井鶴三研究に携わり、作品調査などで各関係機関へは何度か足を運んできたが、いわゆる石井の「身内」の方々とお交わりができる機会はなかなか得られなかった。また特に今回は、論文における著作権使用許諾で大変お世話になっている岩部氏も出席されるとのこと。電話以外で岩部氏に挨拶を申し上げたことがない我が身にとっては、万難を排してでも総会に出席すべきこ

とは当然の責任のように思えた。

総会前日の7月5日（金）は、私が所属するある学会の北海道支部総会があり、その春、北海道の釧路に着任したばかりの私は出席しなくてはならない立場であった。13時半からの上田市での総会に間に合うためには、6日（土）当日の朝、新千歳空港を8時に発ち、羽田から鉄道を乗り継ぎ東京10時44分発の長野新幹線で向かう以外に方法はなかった。乗り継ぎ時間に数分しか間がないところもあり、東京駅では切符を買わずに乗車証明を受け取って、ホームに駆け上がった。

読み合わせ会というものが、友の会の研修活動の一つとして取り組まれていることを知ったのはそうやって駆け付けた石井鶴三美術友の会総会の活動報告の中であった。会議のレジュメからその個所を抜粋する。

（４）読み合わせ会 年7回

前年度に引き続き、鶴三挿絵の子母沢寛原作『父子鷹』を読み味わい、それをどう挿絵に表現しているかを話し合いました。お互いの考えを出し合い、楽しいひと時でもありました。また、遠く東京から会員の岩部さんも加わり、新しい見地からの意見もあり楽しく話し合いができました。

この中で語られているように、石井の挿絵鑑賞が楽しいものであり、それゆえに岩部氏も再度参加するところとなったことは察しがつくが、その楽しさが石井の当地における業績そのものであることは、実際に参加するまでよく掴めなかったのが本音である。

そこで、総会が終わった後で読み合わせ会について、「いったいどんなことをするんですか」と岩部氏に尋ねてみた。すると、岩部氏は「最初はあまり関心がなかったんです」と言いながらも、「参加したらこれが最高に面白いんですよ」と、もう楽しくて仕方がなかったと言わんばかりの笑顔でその感想を伝えてくれた。総会を終えたこの時には、私はこの感想が単に娯楽的なレベルのものではないことがすっかり理解できる意識になっていた。総会の冒頭、24年度で席を退く会長の今井満氏の挨拶の中で発せられた言葉が、その日から今日に至るまで、上田における石井についての問題意識のすべてに浸透することになったからである。

「上小教育会の精神的支柱は石井鶴三にある」

没後40周年を迎えた平成25年、齢88になる今井氏にそう断言させしめるものとは何か。今井氏は、石井鶴三美術館の初代館長として、「石井鶴三の業績がその作品とともに上田にあること」を第一に取り組まれた。しかし今井氏は、その挨拶の中で石井の業績を受け継ぐ「環境造りには遅れてきた」ことを反省点として、これからは勉強会などを積極的にやっていきたいことの宣言をもって長年の会長の責務を括られた。つまり今井氏は、物的環境ではなく、作品とともに残された石井の精神に関わる教育環境のことを念頭に置いていたのである。そして、その総会の翌月末、岩部氏からの案内で参加した読み合わせ会のうちに、石井の精神をもって教育会の精神的支柱とするその具体的在り方が、正に機能して

いることを知ることになるのであった。

2. 松本の夜

読み合わせ会は28日(水)であるが、それに合わせてその他の調査や研究関係者との親睦も図っておきたいものである。岩部氏からは、27日(火)の午前中に信州大に出向くということを伺っていたので、私もこの機会に信州大学に本稿『付属図書館研究』の打ち合わせをすることにして、担当者の折井匡氏と3時ごろ面会の予定を組んだ。そこで、午前中は、木曽福島へ赴き、木曽教育会の郷土資料館に挨拶を兼ねて訪れる計画を立て、その前日夜に松本に入ることにした。

釧路から松本へ向かうには、先ず釧路空港から羽田空港。モノレールと山手線を乗り継いだ東京駅からは2ルートあるが、今回は長野新幹線を利用して夜の10時過ぎに松本に着いた。改札口前で出迎えてくれたのは信州大人文学部の金井直氏、少し遅れて碌山美術館の武井敏氏も奥様の車に送られてやってきた。私が信州にやってくる理由は一つしかないことはお二方とも知っている。駅近くの居酒屋で「どうしてそんなに石井の研究をするようになったんですか」と武井氏は訊く。こうした問い掛けは、私が石井研究に没頭している事が知られ始めたためであり、確かに有難いことである。しかしこれは、返すならば、石井鶴三研究が美術史の中ではまだ少数派ということの証なのかも知れない。これまで、日本近代彫刻史の中において石井はどう扱われてきただろうか。石井の業績を肌で覚えている人が少なくなっている今日、こうした問い掛けを有難く思うと同時に研究の緊急性も改めて感じるのである。私が石井の研究を行うのは、石井の説く造形理論が作品とともに首尾一貫して矛盾がないからである。要するに、石井の研究を通して我々は美術の原理に到達できる可能性がある。読み合わせ会が何故17年もの間に90回を重ねることが出来たのか。それは真摯な仕事ぶりに徹した石井に、追究に値する一貫性があるからに他ならない。それも極めて高いレベルでの一貫性であるからこそ、挿絵を読み解いていく作業に実りがあるのだ。

トンネルの多い新幹線の旅では気付かなかったが、この日の午後、長野は猛烈な雨に見舞われたらしい。傘を持っていなかった私を気遣って、金井氏は片手で自転車を押しながら、ホテルまで傘を差して送ってくれた。

3. 読み合わせ会

岩部氏も前日松本に宿泊されていたので、28日当日は時間を合わせて8時5分の長野行きに乗り、長野からは長野新幹線上田に向かった。読み合わせ会は10時半からであったが、駅で荷物を預けるのに時間が掛ったためか、教育会館に着いたのは半を5分ほど過ぎてしまっていた。会場



図1 教育会館玄関の掲示板

の第4会議室では、最初の読み合わせが始まっていた（図1）。

会議用の長机を口の字型に向かい合わせた会議室は、遅れて到着した私達を入れて10人。本日の題材は読売新聞夕刊で1955年5月から1956年6月まで連載されていた『父子鷹』¹、「仲之町の章」（新潮文庫版 pp.340-348）、挿絵番号406、407、408、409、410である。

私達が朗読の途中に割って入ってしまったので、話し合いは一瞬中断したものの、また何事もなかった調子で淡々と再開された。場面は、それまでの内容を読んでいないので文章内容から想像するところでは、堅物の剣士虎之助を小吉（後に主人公と判明）が人生の勉強と称して吉原の遊郭「佐野槌」へ無理に連れて行き、中に入らせようとひと悶着しているところの様である。朗読が終わると、直ぐに意見が出たのには驚いた。場面には誰と誰が描かれているだろうか。おかみは「百軒ほども走ったことがない」というから太っているのではないか、などなど（図2）。

展開はスムーズである。「もういいですか」。司会役の方が様子を見て切り出す。意見を出さなかった人も秘かに自分の考えをまとめているような空気が感じられた一瞬後、サッと挿絵の原画が示される（図3）。

「ああー」と歓喜ともため息ともつかない声を発した後は、「うーん」、「そうかあ」、「やっぱり」などなどの思いが、なんとも言えない和やかな空気に包まれていく。石井が描いた挿絵が唯一の答えでないことは皆さん承知の上である。しかし、石井が下した判断には、十分な検証に堪えるだけの信頼性と妥協ない真摯な情景描写があり、そこからは実に豊かなことが汲みだせることを、誰もが全幅の信頼を置いて受け止めているからである。



図2 活発な意見交換

文章の朗読後、直ぐに描写内容を推察する意見交換がなされる。会員の方がそれぞれ積極的に発言をされていたのが印象的であった。



図3 挿絵（原画）を確認する

原画が提示される瞬間は何ともワクワクしてしまう。提示された挿絵は、その瞬間パッと会場を明るく照らすようである。その面白さが読み合わせのテンポのよさとなる。

読み合わせ会の本当の楽しみは、実はここからである。それまでは情景描写を推察する楽しみだったところから、この瞬間からは描かれた場面の読み解きと考察に深まっていくからである。もちろん、関心は出席者と石井との答え合わせ自体ではなく、石井の目線に立った物語の状況解釈とその場面描写の

背景の方に注がれる。この作業が実に楽しい。

4. 読み合わせがもたらすもの

読み合わせ会での挿絵の鑑賞は、実に知的で文化的な取り組みである。挿絵原画は出席者に手渡しされて手元でゆっくり鑑賞される（図4）。近くで原画を見ることは細かな筆致が確認できるだけでなく、その人自身が挿絵に抱いた所感が具体的な問題意識として絆のように手元の画面と結びつくのである。原画は、石井の人となりや肌を感じさせる。作品が手元に回ってきた時、その人は石井と対面し個人的に会話をしているのである。ここにコピーや印刷されたものにはない、原画の強みがある。

原画が自分のところに回ってくる間にも、出席者皆さんの間では次々と感想が飛び交う。「虎之助は直線的な線で描かれていて、いかにも強そうだ」。「百軒ほども走ったことがないとあるから、どんな格好のおかみかと思ったら意外とほっそり描いてある」。「後ろを向いている虎之助の横顔からは、形相がどんなだか判るね」。「太い眉がグッとつり上がって、ギッと」。「それに比べて子吉は、柔らかそうな線で描いてある」。そういう皆さんの感想は、なるほどその通りだと感心させられることばかりである。さすがは百戦錬磨の先生方。先生方の解釈を伺っていると、小吉の顔立ちなどは、肉付きだけでなく、色白の肌まで浮かんでくるようだ（図5）。



図4 原画を味わう

原画の読み解きをする今井満前会長と増田節子氏。今井前会長は、出席者の中でも挿絵の画面構成にとりわけ強い関心を示していた。

5. 読み合わせの奥行



図5 挿絵 No, 406

© Keibunsha, Ltd. 2015/JAA1500047

読み合わせ会の特質の一つは、出席者と作者石井鶴三の間の距離が極めて近いということである。会話の盛り上がりは、石井を直接知っているという親近感によることも小さくない。皆さん、石井のことを尊敬し、そしてそれ以上に大好きなのである。

挿絵の鑑賞は、石井はどのように時代考証的な史料を得たのか、彫塑講習会の間はどうしたのかなど職務上の問題から、石井の人柄と仕事ぶり、石井の生きた時代と出席者の方々の生活、小説が描く時代背景、はたまた「吉原」はどんなところかなど。個々人の人生から風俗史までの話が、さまざまな小ネタとともに紹介交換され、知

的に共有されていく。

石井の挿絵の描出法とそれに関わる出席者の方々の話題が最も華やいだ次の場面（挿絵 No.407）を紹介しよう。続く場面の粗筋はこうである。小吉は、いやな顔をして返事もしなかった虎之助に無理強いして、佐野槌の座敷に上がらせることに成功した様子である。頻りに虎之助に酌でもてなす女達の間を見て、おかみは小吉を廊下に連れ出す。そこでおかみは、「内所」に顔を出して女達の話聞いてやってほしいと小吉に懇願する。小吉は「面倒くせえよ」断るものの、根負けして承諾する。おかみが鮎を取りに階下へ降りたところで、小吉は座敷に戻って虎之助にもっと飲んで出鱈目放題したらどうだと声を掛ける。

この場面の登場人物は、先の小吉、虎之助、おかみの3人と何人か特定できない酌を勧める女達である。この時、人物の動きに注目した場合の状況は、座敷、廊下、階下へ降りる、再度座敷に戻る、の四つに分けられる。この場面のいずれかが描写されるはずというのが大方の見方である。先には3人が描写されたので、ここでは指向を変えてくるに違いない。だとすれば、廊下での立ち話が描かれるのではないかという意見が出され、それが妥当と思われた。少し発言を試みたくなった私は、「好きなことを言っていますよ」という司会の方に促され、石井は「階下に降りる」おかみを描くことで、丁度幕間のように場面を切り替えたのではないかと予測した。ところが、結果はあっと思わせ、やはり石井鶴三だと感服させられる切り口であった（図6）。

図6は見ての通りである。つまり、小吉とおかみはそこにおらず、描かれているのは、廊下で立ち話をしているその裏舞台の様子である。さすがである。石井はこの場面では、あえて文字で表わされていることを視覚化せず、状況から浮かび上がってくる事態の



図6 挿絵 No.407

© Keibunsha, Ltd. 2015/JAA1500047

方を描き出すことで、物語の世界に広がりを与えているのである。言葉で表現されている世界はいわば見えているもの、石井風にいえば間口の世界と言えるだろう。であれば、そこから空間的にも異なる場面はその間口の奥行きを構成する。石井が残した「文学にも立体感覚」²という言葉は、あるいはこうした空間の感覚のことなのかも知れない。

鑑賞の喜びが躍動するのは、こうしたハッとする展開を受けた後である。この場面が、賑やかなお屋敷の閉じられた障子戸の中であれば、ちょっと覗き見した気分させられる。場慣れしない堅物の武士が、複数の遊女に囲まれて身構えている様子はユーモラスでさえある。しかし、石井の見識はそうした状況設定に甘んじない厳しさと正確さに貫かれていることを、参加者の方々はしっかりと見抜いている。遊女たちの髪型、着物の着方と種類、帯の結び目の位置（遊女は前で結ぶといわれる）など、女性の会員方の目は鋭い。石井は、こうしたことを「どうやって調べたんだろう」「何か資料を手元に用意していたのだろうか」「彫塑講習会など、長期間上田に滞在した時は仕事道具を持ってきたのか」「きちんと

と硯がしまわれるようにリュックの整理をして、毎回用具も持参してきていた」。皆、石井の仕事の確かさがいったい何に裏付けられるものなのか関心があるようだ。

そのこととも関わって、皆さんが特に強く興味を示していたことは、「吉原」が具体的にどのような場所でどのような建物空間だったのかということである。そして、石井はそれをどうやって挿絵に再現したのか、あるいはできたのか。「私が学生で東京に出た頃には、もう遊郭はなかった」。出席者のうち、誰一人吉原に行ったことがない。そのことも想像力を掻き立てる要因となるであろう。では石井はどうだったのか。

ここで、岩部氏から面白いエピソードが紹介された。ある時石井は、画家の中川一政氏に吉原に誘われたことがあったという³。女の描き方の勉強のためというのがその目的らしい。しかし石井は気が進まなかったのか、「妻に聞いてみます」と言って妻に電話を掛けたそうである。妻の美佐は「それは厭ですわ」と一言。それを理由にその計画から逃げたというのだ。どこまでも真直ぐな人である。興味津々で耳を傾けていた私たち皆からは、どこか安堵にも似た笑いが起きる。「たんだ一本の線」というのは、デッサンを例にとった制作の心得であるが、平素と異なる一面を持たない一本義な石井の在り方そのものを言い表しているとも思えてくる。石井に厚い信頼を寄せる出席者の方々はその一件の顛末を通して、石井のことを再認識し、一層信頼感を強くするのである。

石井を信頼し愛する人々にとって、石井のエピソードは小説と並行する別の物語である。そこには、もう一つの物語を共有しようとする人々が集まり、ひそかに自分の物語と重ね合わせている。石井の挿絵は小説を超えて、作者の物語を介して鑑賞者の物語までを描き出すのである。

6. 挿絵の空間構成

石井が信州にとりわけ上田に残した業績は大きい。上小教育会館の石井鶴三資料館には石井の業績と精神が作品とともに残され、教育上の財産として受け継がれている。石井の美術論の核心が立体感動にあることは周知のことである。上小教育会の人達にとっても、美的生活と教育上の理念に関わる重要な



問いとして、立体感動とは何かという思いは生きている。石井は日本の文化には奥行きが無いと語ったが、挿絵の読み合わせの際に、描かれた場面を空間の構成法の面からも考察させるのは、石井の精神が受け継がれているからか、あるいは挿絵が自ずと鑑賞者に対し、そうした問題意識を醸成するのか。

こうしたことを、読み合わせ会の展開に沿って考えてみよう。次の挿絵を見ていただきたい。これは、虎之助を座敷に残して、小吉が先におかみに頼まれていた女達に会うため内所にいったところに、お糸という旧知の女性が一人で待っていたという場面である(図7)。

図7 挿絵 No. 408



図8 挿絵 No, 409

© Keibunsha, Ltd. 2015/JAA1500047

況を描写したものだろう。そうした状況自体は文章に綴られているが、微妙な空気と暇を持て余す心理はどのように視覚化されるのか。石井がここで描出して見せたことは、読み合わせ会の中で一つの空間表現として見事に読み解かれていく。

この絵を見て、先ず気付かされるのは、二人の登場人物にも匹敵する存在感のある行灯であろう。当時の行灯がどのようなものであったか、ここでそれを知る術はなく、またそれに関して知識を持っておられる方もいない。しかししっかり描かれた行灯は、まるで柱時計のような存在感を以ってこの場面の時間を表しているようである。出席者の方も、行灯の大きさと形状には関心が持たれている様子であった。この行灯との関係で、お糸が手にする細長い棒状のものが何か話題になった。2本の線で描かれているから、火箸のようにも見えるし、女性用の煙管にも見えなくはない。しかし、これは文章にも暗示されるものではなく、その正体を特定するまでには至らなかった。

そうした描写内容についての意見と前後して、今井氏からは内所の描かれ方についての意見が出た。氏は、部屋の壁らしきところに何も描かれていないことと、とりわけ床と壁の境界線が行灯の右横に延長されず、省略されていることに理由を見つけようと、原画を手にとり考え込み、時に原画を皆に提示をしながら意見や同意を求めていた。そして、皆の解釈の流れとして、背景に余計なものを描かない方がすっきりと見えやすいということ、その観点から、行灯右側に線が入らない方が空間的に狭苦しくなくてよいはずだということに落ち着き掛けた。すると誰かが小吉の足先の落ち着きのない様に気付き、「手持無沙汰が足に表れている」と発言され、確かにそうだと満場一致の同意を得た。この目線で挿絵を見ていくなら、小吉の足が落ち着きなく宙に浮いたように見せるためには、そのすぐ上に被さる線は、空間を狭くしてしまい逆効果であると了解されてくる。今井氏も、解釈の流れの中で、構図の問題についても合点がいった様子であった。

7. 空間のこだわり

挿絵 No,409 の空間構成もそうであるが、石井の描写は、挿絵の中心主題となる人物以外の要素への

小吉はお糸から、少々面倒な相談を持ちかけられ、それを一蹴しようとするものの、妙な縁絡みでそれもできず、気分が釈然としない。「小吉は少し退屈そうな顔をして」、ごろりと横になってしまう。話題に詰まりお互い黙ってしまい、行灯だけが瞬くよそよそしい空気が流れ始める。小吉は、じいーっと下からお糸を見上げて不意に、今度は自分の方から頼みごとを持ち出す(図8)。

内所で女性と二人きりの中、ごろりと横になったなんとも締りのない退屈そうな場面である。行灯の瞬き以外に時間を感じさせるものはない。そんな状況

配慮も際立った効果を醸している。それは、石井自身の緻密な検討の結果であることが、原画の細部に認めることが出来る。

この日に扱った最後の場面である。先に小吉が切り出した頼み事とは、お糸のかつての許婚相手との恋人情である。よりを戻してやってくれと頼む小吉を、お糸は「折角ながらいやで御座ります」と妙に不服そうに断る。取りつく島もない様子のお糸に小吉も観念して、話題を変えるようなそぶりでおかみに頼んでいたお鮎を取り寄せ、お糸と一緒に食べ始める。そんなひと時が心うれしそうなお糸に、そっけない振りの小吉は、おかみを呼びにお糸を行かせた。そうしたところ、おかみからは、二階で虎之助が引き止めるものを引きずって強引に帰ろうとして大騒動を起こしていたことを聞かされるのだった。

この情景は、比較的予想の意見が一致していた（図9）。しかし、誰も具体的に予想出来なかったことは家屋内の空間描写である。大きな廊下と踊り場。広いしっかりとした造りの階段。「広いねえ」。「大きな建物だね」。「まるで学校のような」。口々に漏れる感想は御殿のように描かれたお屋敷のスケールについてである。挿絵は石井の創作であるが、それを通して、まるで初めて遊郭の建物を見物した気分にさせられるのは不思議である。私自身、この段ではすっかり石井の描写に全幅の信頼を置いていた。

石井を初め、誰も吉原に行ったことがなければ、実際の建物と様子が違っていてもそれは許されてよいのである。小説も挿絵も共に創作なのだから。その中で一番大切なことは、それらがいかに読者の心と響き合うかであり、ここで石井は空間の効果に立った見事な手腕を発揮している。迷惑そうに障子戸から覗く男と女。不安げに離れて様子を見守る二人の女。「周りの人は困った様子だけど、虎之助を囲んでいる女の人は楽しそうだね」。状況全体を考えるなら、虎之助が起こしている騒動はコメディでしかない。そしてそのドタバタぶりは、一つの舞台で繰り広げられていることなのであれば、石井はまるで舞台演出家のようなようでもある。

そう思いながら、これまでの挿絵を眺めるなら、全ての挿絵に空間構造を示す直線が用いられ、挿絵は3次元的世界として描かれていることに気付かされる。空間として現れたものには、私たちは現実性を覚える。挿絵が空間的に描かれることは、読者の現実との接点となる。それは小説の物語と読者を繋ぎ、読者の人生の一部を物語と同化させるのである。石井が挿絵を創作するにあたって、その空間性を重視していた証拠がある。それは廊下奥、障子戸の下端部分。奥で見守る女達の頭付近である。廊下に沿って並ぶ障子戸は、線遠近法的に表現されている。原画を手にとってみると、石井はその最奥、女の



図9 挿絵 No. 410

© Keibunsha, Ltd. 2015/JAA1500047



図10 障子戸の修正箇所

頭付近で一部の縦線を白インクで消去しているのが見て取れる（図 10）。これは、演出効果としては微小なものかも知れない。しかし、それだけに空間演出にどこまでもこだわる石井の一貫性とそれゆえに置ける信頼性の証となっているのである。

私は、この日の読み合わせで披露された 5 枚の挿絵の中では、内所でお糸が一人待っている挿絵（No.408）がお気に入りである。一人姿勢良く正座をし、戸が開いた瞬間、背を伸ばすように向き直る。「内のデッサン」という石井の造形方法論は有名であるが、お糸の姿勢にはその内のデッサン、つまり「中心動勢」という体軸が明確化しているように思えるのだ。この場面で、一瞬のときめきを迸らせるお糸の心はその表情からではなく、それ以上に内のデッサンが構造的に具現化しているのである。中心動勢という、表現における最初の一事を起点にして、空間全体がそれにしたがって構築されていく。読み合わせ会は、その挿絵の構造に沿って物語を解釈していく。長年、上小教育会の会長に携わってきた今井氏が総括する教育会の「精神的支柱」は、人間世界の構造化に欠かせない「親柱」、それも生きた現実を構築する「動勢」という能動性のある柱と言えるのではないだろうか。読み合わせ会の文化的な空間も、きっと石井が遺した精神的支柱に支えられているのである。

8. 三羽の鶴

石井鶴三の「鶴三」は珍しい名前である。こうしてワープロで原稿を書く際、当然、そのままの読みで変換されることはまずないので、「つるさん」と打つことが多い。いったいこれまで何回「鶴三」の二文字を打つために「つるさん、つるさん」とやっただろうか。もちろん、それはこれからも続く。

読み合わせ会がお開きになる時、せっかく遠くから参加したのだからということで司会の方に促され、読み合わせ会の感想を求められた。私は、率直に想像をはるかに超えて興味深くまた楽しいひと時であったことをお伝えし、貴重な体験をさせていただいたことにお礼を申し上げた。会場である教育会館の職員（理事）で友の会にも尽力されている橋詰良登氏は語気を強めて「よかったあ」と胸を撫で下ろす様子であった。石井を愛す自分達のひそやかな愉しみが、一体どんな風に目に映ったのだろうかと不安になられたのだろうか。しかし私には、こんなにも知的で文化的で、しかも芸術性の高い勉強会を他に見出すことの方が困難に思える。

散会した直後、信州に発つ直前に釧路で買ってきたお土産を皆さんにお配りした。何も考えずに買った釧路の銘菓「丹頂鶴の卵」は、ちょうどその日の参加者の人数分の 10 個入りであった。卵型のお菓子が丹頂鶴のイラストの入った包み紙にくるまれている。お一人に一つずつ渡った時、女性の参加者 3 名が「私達で鶴三なんです」と嬉しそうに声を掛けて来られた。一瞬何のことか呑み込めなかったが、机の上に目を落としてはっと気付いた。なるほど「鶴三」。3 個のお菓子が並んでいた。

釧路湿原でしか生息していない特別天然記念物の丹頂鶴。



北海道の道東に位置する釧路は、石井鶴三とは縁遠い地のようにあったが、ここには鶴がいた。北海道のお菓子が、信州で「鶴三」に生まれ変わる。たとえこじ付けだとしても、釧路と信州が石井を介して結びつくことに幸せを感じた。「つるさん」。鶴三はやはり鶴が三羽なのである。

-
- ¹ 子母澤寛の小説。舞台は江戸末期、勝海舟の父、勝小吉を中心に旗本と市井の人々の生活が描かれている。
 - ² 「彫刻いろはがるた」より。『石井鶴三先生—信州上田と—』、小県上田教育会、1974年、p.80.
 - ³ 石井鶴三の様々なエピソードが、中川一政の文集（中央公論新書）に綴られている。岩部氏は中川氏とも懇意の仲であったという。